＜調査報告＞

テレビドラマ『本日も晴れ。異常なし』と波照間島
ー観光と農業のはざまでー

圓田浩二[1)]
小野崎綾香
津嘉山掌吏

キーワード：波照間島，テレビドラマ，観光，農業，フィールド調査

Ⅰ．問題の所在

ここ十数年、沖縄県は，観光立県を目指し，多くの観光客が，沖縄県を訪れている。平成22年度では，571万人余りの観光客が沖縄観光を楽しんでいる。この沖縄観光ブームは，地元沖縄県の宣伝以外にも，旅行会社，航空会社，書籍・雑誌，マス・メディアによって，宣伝されてきた。社会学的に見れば，近年の沖縄ブームは，各種メディアが意図的に構築したイベントであった。沖縄を舞台としたテレビドラマや映画は，2000年以降に限っても，数多くあげることができる。テレビドラマでは『ちゅらさん』，『瑠璃の島』，『Dr.コトー診療所』，映画では，『ナビィの恋』，『真夏の夜の夢 さんかく山のマジルー』，『ニライカナイからの手紙』などがある。これらは，いずれも，沖縄の離島を舞台としており，沖縄観光における離島ブームの隆盛を証左する作品たちである。

沖縄のある離島を舞台にしたテレビドラマがある。『本日も晴れ。異常なし』である。このドラマの冒頭で，南十字星が重要なキーワードとして出てくる。日本で南十字星が見ることができる島で有名な場所と言えば，波照間島である。しかし，このドラマには，波照間島という言葉は出てこないし，最後のテロップを見ても，「波照間商工会」や「波照間観光協会」といった文字は見ることはできなかった。本調査報告では，ごく簡単な問いを立てて，調査結果を報告する。その問いとは，「なぜ波照間島を舞台としたドラマなのに，波照間島の存在がないのか？あるいは波照間の名前が出てこなかったのか？」である。

Ⅱ．日本最南端の有人島、波照間島

波照間島は日本の最南端に位置する有人島である。住民基本台帳によれば，2011年11月現在で，人口548人である。周囲14.80㎞，面積14.90k㎡，石垣本島から約42㎞の洋上にある。日本国内で南十字星を秋から春にかけて見ることができる数少ない場所である。そのため星空観測タワーも備えている。この星空観測タワーと，その近くにある日本最南端の碑，ニシ浜ビーチぐらいしか観光名所はない。主にサトウキビの栽培が盛んなため，農業従事者が多い。また，酒造場があり生産数が少ないため，入手困難とされている『泡波』がそこで製造されている。

それゆえ，波照間島は，サトウキビ畑と森という自然に囲まれた島であり，道端に山羊が見られたりする。どことなく，どこかで人々を落ち着かせる独特な空間をもっている。それが観光客を引き寄せるのであろう。また，海もコバルトブルーに染まり，海水浴やシュノーケリング，スクーバ・ダイビングが人気である。長期休暇を取り，何年間も波照間島にシュノーケリングをするためにやって来るリピーターがいたりする。

島内の医療機関は診療所である。そのため，大きな病気やお産などするときは，船を使って石垣島の病院まで行かなくてはならない。以前は、飛行機も飛んでいたのだが，需要がなく2008年10月をもって運休となってしまった。波照間空港は施設として今も存在している。

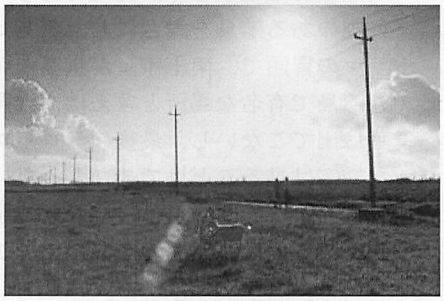
島内に存在する教育機関は，小学校と中学校までで，生徒数は60名ほどである。高校進学の際には，一番近くに高校がある石垣島まで行くことになる。したがって，島の若者は高校進学と同時に，島を出ることになる。そして、石垣や沖縄本島の高校卒業後，大学に進学する数も多いようだ。社会人になって，島に帰ってくる若者は男性が多く，女性は少ない。沖縄本島や本土で結婚相手を見つけ結婚してしまい，そこに生活の場を得るからである。

波照間島の人々は，「神の島」と呼ばれるほど，伝統行事と祭りを大切にしている。代表的な祭りが「ムシャーマ」だ。そのほかに，「プーリン」や「アミジュワ」などの祭りがあげられる。よく知られているのが「ムシャーマ」である。「ムシャーマ」とは，家内の安全や豊年の祭りとされている。何百年も続いており，伝統文化を残すといった意味で参加者は多い。波照間の人々にとっては，大事な行事であり，参加することが当たり前だと思っている。しかし，年々若者が減ってきており参加者は減少傾向にある。ムシャーマの祭りでの一番の見せ物がミルク様の率いる仮装行列であり、島外移住者や観光客も参加できる。私たちが行った聞き取りでは、移住者や初めて見る人は，そのミルク様の姿を見て、「変わった祭りだ」と驚いたと述べる人もいた。

島の特徴を一言で言えば，昔ながらの生活を続けていることである。波照間島の人々は，伝統文化を守り，自然の中で力強く生きている。都会慣れした現代人には，とても住みにくいと感じる人もいるだろう。しかし，この島では，今も昔と変わらず同じ生活を送り続けている。

Ⅲ．『本日も晴れ。異常なし』の設定とストーリー

『本日も晴れ。異常なし』[1]は，南十字星が見える日本最南端の有人島，沖縄の波照間島をモデルにした架空の離島『那瑠美島（なるみじま）』を舞台に，この島に新しく赴任した駐在員と島民たちのふれあいを描くヒューマン・ドラマである。



画像 1　ドラマの１シーン：
駐在員と女性教員が歩くシーン

那瑠美島には特別な産業があるわけでもなく，サトウキビ畑が広がる平和な過疎の島で，1月から春までの期間限定で，南十字星が観測できることだけが唯一の誇りであった。島民はみな，擬似家族のような連帯感を持って暮らし，何かあれば，一夜にして全島民に噂が広まってしまうような小さな島社会である。そのためか，殺人事件，暴力事件はもちろん，ささやかな窃盗事件さえまったく起こらない。家に鍵をかける必要などまったくない平和な島に，ある日，駐在員が赴任してくることになった。島民たちはがっかりする。なぜなら，島人たちは駐在さんではなく，医者を熱望していたのだ。あまり歓迎されずにこの島にやってきた駐在員は，その人柄と情熱で，貧困や過疎化，少子化，

高齢化に悩み絶望し，島の行く末に絶望しつつあった島民の心を変え，希望の火を灯し，笑顔を生み出していく。

ここで主な登場人物の紹介をする。白瀬遼（坂口憲二）は，新宿警察署の組織犯罪対策班，いわゆる「マルボウ（暴力団関係担当）」にいた敏腕刑事だったが，ある事件に遭遇し心に傷を負い，「本当に自分にできることは何か？」を自問する。その後，人事交流研修制度があることを知り，沖縄の果ての，駐在所のない那瑠美島での駐在研修を志願した。

西門うらら（松下奈緒）は，島にある唯一の小学校の先生である。「教育僻地があってはならない，誰も行かないなら自分が」と高い志をもってこの島にきたが，南の離島に辟易している。なにより，この島の小さなコミュニティにはプライバシーというものがないのが嫌だった。そして，「サトウキビ畑とヤギしかいない退屈な島」と内心思いつつも、そんなことを決して島の人に悟られてはいけないと思って笑顔を絶やさない。

この二人のロマンスを中心に，物語は進んでいく。那瑠美島の登場人物として，女手ひとつで育ててくれた母親が突然亡くなり，駐在員に育てられることになる二人姉弟，サトウキビ農家の息子で，島の青年団長の若者や，公民館長，先生の下宿先の女将さん等が登場する。ほとんどのロケ地は沖縄本島北部で行われた。

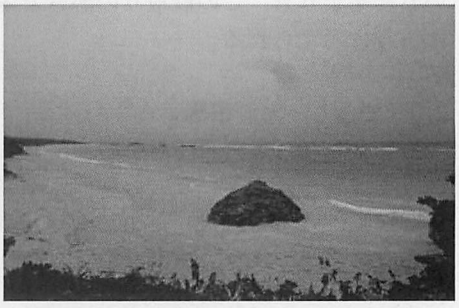
Ⅳ．なぜ波照間島が舞台に選ばれたのか？

1．なぜ波照間島だったのか？

TBS 製作のテレビドラマ『本日も晴れ。異常なし』のロケ地は波照間島であった。しかし，波照間島のロケは，２日間のみ，後のドラマは沖縄本島で撮影したらしい。つまり，ほとんどが沖縄本島で取られたドラマだったのである。

画像 2　ドラマの中のニシ浜ビーチ

では，なぜ波照間島だったのか。最初の住民への聞き取りでは，「てっちゃん」という若い警官がヒーロー的な存在で，その人をモデルに撮影したと，幾人もの住民が語っていた。しかし，当時ロケ班の受け皿となった商工会の青年部の代表だった人物 A さんに話をうかがってみると，次のような「事実」が浮かび上がってきた。とある島の共同売店のオーナーが，友達を通じて，TBS のプロデューサーと知り合いだったという。彼からもちかけられたのが，大ヒットしたテレビドラマの『Dr.コトー診療所』の「警察バージョンを作りたかった」ため，話を波照間島にもってきたのだという。



画像 3　2011 年 6 月 25 日撮影のニシ浜ビーチ

そして，何度かそのプロデューサーが波照間島を訪れ，ドラマの撮影の話は進んでいった。そして，2009 年 1 月から，全 10 話のドラマが放映されることになった。しかし，肝心の台本の作成が遅れ，９月撮影開始が，10 月に，10 月撮影が 11 月に，11 月撮影が 12 月になってしまった。そのため，ロケ班総勢 50 名を受け入れる準備をしていた宿は，相次ぐキャンセルと延長に悩まされたという。A さんは「キャンセルは 5 回くらいありましたよ」と語っている。

画像 4　サトウキビ畑と電柱、未舗装の道路（2011.6.25 撮影）

そして，放送を1月に控えた，12月にロケが始まった。波照間の冬場は海が荒れるため，石垣からの高速船は，欠航が相次ぐ。その季節に，ロケ班総勢50名は，波照間島にやってきた。ドラマの登場人物として来たのは，主役の男優とヒロイン役の女優の二人のみであった。ロケ班は，「オープニングと最初のシーンのみを撮っただけ」で帰っていたという。そして，その後の撮影は，沖縄本島で行うことになる。どうやら，主人公役の男優が忙しくて，波照間島での長期滞在ロケは不可能だったらしい。これには，波照間島の交通アクセスの悪さが影響している。そのため，「ここまでくるのが大変。本島だったら深夜入りしてロケして，日帰りで帰れる。ＸＸがずっと断っていたでしょ。スケジュール的に無理だって言って。どうしてもってことで」，沖縄本島でのロケに切り替わったという。結局，「オープニングとか2カ所くらいしか使われてない」となった。そのシーンとは，主人公の警察官が自転車を押して緩やかな坂を上がっていくシーンと，サトウキビ畑とヤギの群れのシーン，ニシ浜ビーチだという。ドラマでは，ヒロイン役が「サトウキビと山羊しかいない島」で，退屈な島であると呟いている。島の人たちは，このTBSの姿勢に怒りを覚えつつも，あきれてしまい，世話役の中心人物だったＡさんでさえ，「俺も見てないからさ」と言って，ドラマを見なかったという。実際，島の住人19名にとったアンケート調査でも，『本日も晴れ。異常なし』を見たことがあるのが10名，見たことがないのが９名であった。この見たことがあると答えた人のうち，「ドラマとしておもしろかった」４名，「内容も風景もぜんぜん違う」４名，「波照間の事をわかっていない」が３名（複数回答可）となった。このように，波照間島の住民にとって，ドラマはあまり肯定的に受け入れることができない仕上がりとなった。Ａさんの言うように，「全12話が11話で終わっている（実際は10話の予定が９話で終了、Ａさんの勘違いと同時に、ドラマを見ていない証拠とも言える）」という結果よりも，この段取りの悪さとスケジュールの遅延がドラマの質も，下げさせてしまったように考えられる。

2.「てっちゃん」伝説

当初、私たちが波照間島を訪れた際に，行ったアンケート調査と聞き取りでは，2009年当時に「てっちゃん」という若い警察官が駐在員として波照間島に派遣され，彼が「とても島のためにがんばってくれた」ため，ドラマが作られたという話を複数人から聞いた。例えば，一人暮らしの老人の家を，一軒一軒毎日訪れ，声をかけるなど，住民のために，がんばっていたという。

私たちは，この「てっちゃん」とはどんな人物だったのか，島の人や，今滞在している駐在員に話を聞いていった。そして，TBSのロケ班を取り仕切ったというＡさんを紹介してもらうことになった。

上に書いたように，Ａさんの話では，ドラマの主人公が警察官であったことと，「てっちゃん」とは何の関係もない。その部分についてのインタビューのやりとりを掲載してみよう。

圓田：モデルになったのは警察官って，てっちゃんですか？

Ａ：モデルになったのは，交番で勤務していた警官がたまたま一緒だったのよ。ＸＸ

とてっちゃんが同い年だったんですよ。たまたま赴任してきた。

圓田：なんか伝説的な人じゃなかったんですか。

A：いやーある意味伝説。

圓田：どういう？

A：人気あったから。

圓田：人気があった･･･

A：人気あった！この人をモデルにしたわけではない。

圓田：この人をモデルにしたわけではない。じゃ架空なんですか。なんかそういう警察官の伝説というか，島を盛り立てて守った人が昔いて･･･

A：たまたま似てた。身長，体格も。遠くからみてもわからなかった。性格的にも似ている感じがした。その彼の実家と坂口君を挟んで･･･

てっちゃんは実在の人物であった。そして，ドラマの主人公ともよく似ていたらしい。しかし，「この人をモデルにしたわけではない」と語られているように，ドラマの話が舞い込んできた経緯でも，実在の駐在員とは関係のない話だった。少し推測をしてみると、当初島の人々は，TBS のドラマで，波照間島が舞台になることを喜んでいたのだと考えてみる。しかし，ロケの長期遅延と，実際の波照間島でのロケが２日間で終わったことで，住民は失望し，反感まで抱くようになった。その感情を埋め合わせるために，「てっちゃん」伝説が生まれたのではないか。理由は次の通りだ。TBS はなぜ離島の駐在員ドラマの舞台に，波照間島を選んだのか。答えは，波照間島でなくてもよかったというものでは納得できない。そのため、納得する論理，社会学では「動機の語彙」に近いものとして、「てっちゃん」という伝説が生まれた。というのも，島の人たちが語る「てっちゃん」伝説が先にあったのではなく，２日間しか滞在しなかった主人公の警察官役の男優に，当時いた波照間島の駐在員を重ね合わせたのだと。つまり，２日間しかいなかった男優の面影を，当時の駐在員に重ね合わせて，ドラマの放映が終わり，当時の駐在員が島を去ってから，「てっちゃん」伝説が生まれたというわけである。私たちが訪れた際の駐在員も，彼の勤務以外のこと，例えば島の団体作業などに，積極的に参加していた。蛇足になるが，現在「てっちゃん」という愛称で呼ばれた人物は，沖縄本島で警察官として勤務しているという。

3. 波照間島とドラマの関係性

波照間島とこのドラマを結ぶ共通項があるとしたら，南十字星だろう。南十字星が見ることのできる日本の島は限られている。ドラマのストーリー上，この南十字星の存在は欠くことができない。しかし，波照間島が観光の目玉として，南十字星をシンボル的に掲げていることは，住民以外ならば，実際島を訪れた観光客にしかわからないだろう。A さんは，「ドラマを見て，波照間島とわかればね。南十字星が見える島は。波照間がわかる人には，「おー！」ってなるけど那覇の人もわからないもんね」と語り，南十字星＝波照間島と結びつける人は，日本本土の人や沖縄本島の人でさえ，そう多くないと話している。

ドラマのロケに波照間島が選ばれたことを歓迎していた人も，実際に島にやってきたロケ班の問題や，ロケ地が沖縄本島に事実上，なってしまったことで興ざめしてしまい，ドラマへの関心をもたなくなってしまう。A さんですら，ドラマを見ていないと言う。「（ドラマの DVD を）送ってこないのは向こう（TBS）だもん」と語られているように，波照間島のロケ協力者と TBS 側との関係は冷め切っていたと考えていいだろう。一応、TBS の『本日も晴れ。異常

なし』のホームページには，「波照間日和」というコーナーが設けられており，その製作者は，TBS との仲介を担ったとされる共同売店関連のカフェのオーナーである。

『本日も晴れ。異常なし』によって，波照間島の人々が思い知ったのは，この島は観光で生きていく島でないということだったのかもしれない。A さんの次の言葉がとても印象的だった。「なんか，民宿の経営があるから，島のアピールになるだろうと（ドラマの撮影を受け入れたけど），それ（番組宣伝のために波照間島を取り上げてもらい，テロップにも波照間の名前を入れること）は，いらないと言いました。そんな観光の島じゃないから」。このようにして，波照間島や民宿名，波照間事業者観光協会の名前は，ドラマには一切登場しなくなった。

V．「サトウキビの島」の観光

沖縄の冬の風物詩と言えば，サトウキビ刈り援農隊が有名である。サトウキビの収穫は，人で必要でかつ重労働なので，12 月から３月まで援農隊を募集する。時給は最低賃金で，宿泊場所と食事が提供される。特に，人手が足りず，若い労働力の乏しい八重山地方の離島では，なくてはならない存在となっている。

「波照間の風景でもっとも印象深いのは，島一面に広がるサトウキビ畑でしょう」と，個人のホームページで書かれているように，村の３つの集落を除けば，サトウキビ畑が広がっている。『本日も晴れ。異常なし』でも，２日しか滞在しなかったロケ班が放映したシーンにも，広大なサトウキビ畑が続いていた。波照間島のサトウキビ栽培は，1914 年に始まったとされる。

波照間島の農業人口は，人口の約７割に当たる 408 人であり，波照間島はサトウキビ農業の島だと言っていいくらいである。サトウキビ畑は，島の耕地面積の約９割を占めており，2006 から 2007 年期の，サトウキビの収穫面積は 181ha，生産量は 11,511t となっている。農家手取り価格は，標準的な品質の場合 1 トンあたり 20,430 円となっている。つまり，サトウキビによる島全体の収入は，235,169,730 円となる。1 年でのサトウキビ収穫による収入は，約 2.35 億円となる。波照間島は，「サトウキビの島」と言ってもいいだろう。

一方、観光はと言うと，竹富町役場の 2010 年のデータで見れば，観光入込客数（以下，観光客）は，27,567 人である。竹富町全体では，888,564人と，90 万近い観光客が訪れている。ちなみに，観光客数で言えば，竹富島 369,874 人，西表島 304,159 人と 10 倍以上の開きがある。波照間島は，その住民が観光によって生活していく島ではなく，サトウキビ農業で生きていく島であるという認識が島の住民の口からは，しばしば聞かれた。観光リゾート開発に対しては，私たちが地元住民と観光客とに対して行ったアンケート調査では，肯定派が 6 人，否定派が 20 人となった。ニシ浜ビーチという白い砂浜と，遠浅の海をもつ海水浴場と，普段観光客が利用しない天然の美しいビーチが島にはいくつもある。観光資源としては，サトウキビ畑が広がる光景に，ヤギと牛とが草を食べ、美しい砂浜をもち，毎月のように行われている神秘的な行事がある。テレビドラマのロケ地に選ばれて，当然の島だと言えるだろう。そして，観光客にとっての島の魅力を尋ねてみると，その魅力は「昔ながらの自然と集落が残っていること」，そして，「何もしないで過ごせること」にあると話していた。波照間島は，特に，観光に力を入れていないが，年間約 27,000 人が訪れる島でもある。それだけ，波照間島は魅力的なのだろう。

しかし，島の人の声に耳を傾けてみると，民宿を経営するＡさんでも，観光には否定的に語る。「ドラマの影響で観光客は増えたんですか」と言う質問に対して，Ａさんは「まぁ常連さんが。与那国みたいに観光客が増えても困る、常識がない奴がいますしね。いい人ばっかりじゃない」と，島への来訪者に対して，警鐘を鳴らしている。そして，Ａさんは「今言ったように農業で。空港は，邪魔だ」と語り、サトウキビ農業で生きていく島であり，今は利用してさ

れていない空港でさえ邪魔な存在だと語っている。アンケート調査や住民への聞き取りをしてみても，Ａさんのような考え方をもつ人が多いように感じた。

波照間島の住民は，島は観光で生きて行く島ではなく，農業で生きて行く島だと考えている。私たちがアンケート調査を実施した際にも，他の八重山の島々とは違う温度差を感じさせられた。島の人たちは容易になかなかアンケートには応じてはくれず，学生達が収集したアンケート数も予想よりずっと少なくなってしまった。民宿を経営しているＡさんの「ドラマで儲けようなんて思ってない。はっきり言って。望んでない」，「そんな観光の島じゃないから」という言葉を，改めて感じさせられた。

しかし，時代は変わりつつある。日本国の TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）への参加が問題として浮上している（2011 年末時点）。TPP は，加盟国が工業品や農業品，金融サービスを含む全品目の関税を撤廃することを目的としている。もし日本が TPP に参加するならば，波照間島のサトウキビ農業は立ちゆかなくなる。標準的な品質のサトウキビの場合，1 トンあたり 20,430 円で買い取られる。しかし，この買い取り価格は，沖縄の特例によって，その買い取り価格の８割が政府の補助金である（農家への聞き取りより）。つまり，実際のサトウキビ価格は，4,000 円余りとなってしまう。これでは，沖縄のサトウキビ農業は立ちゆかなくなってしまう。農業で生活している波照間島の人々に言えるだろう。そして，TPP によって，波照間島の農業が他の農産物を作ることになれば，昔のように水田が復活するかもしれない。しかし，兼業でも可能なサトウキビ栽培とは異なり，他の農作物は収穫に至るまでの手間と作業が大変である。サトウキビの場合，収穫時に人手がかかるだけであったが，他の農作物を育てていく場合，高齢化している島の人口と，住民の生計がどう成り立つのか，これが大きな課題だと考えられる。観光化を推進せず，「サトウキビの島」として生きる道を選択している波照間島は，この先，どうなるのか，どのような選択肢を採るのか，見届けようと思う。

注

１）本稿は、Ⅱ節が小野崎、Ⅲ節が津嘉山、Ⅰ節・Ⅳ節・Ⅴ節が圓田によって執筆されている。
２）TBS 系列にて、2009 年１月から３月まで、全９話が放映された。脚本は藤本有紀、作中の音楽は池頼広、松下奈緒である。キャストでもある松下奈緒は、音楽制作にもかかわっているようだ。演出は、加藤新、武藤淳、山本剛義。プロデューサーは植田博樹、正木敦である。

参考文献

新川明（1978）『新南島風土記』大和書房
藤野昌明（2004）『与那国島サトウキビ刈り援農隊―私的回想の 30 年―』ニライ社
来間泰男（1982）「波照間島の農業とユイの意義」『波照間島調査報告書　地域研究シリーズ No. ３』所収 沖縄国際大学南島文化研究所 pp.39-57
高村学（2009）「まちなみ保全制度の逆説とその克服方法」『創文　NO.522.』pp.15-18
立命館大学政策科学部（2009）『竹富町波照間島研究報告書－島民ライフ・ヒストリー集とアンケート調査－』立命館大学政策科学部

参照ウェブページ

http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/contview.jsp?cateid=233&id=24177&page=1（2011.11.14 閲覧）
http://www.kt.rim.or.jp/~yami/hateruma/sugar.html（2011.11.15 閲覧）
http://sugar.alic.go.jp/japan/view/jv_0302b.htm（2011.11.15 閲覧）